

## 將軍の殿様扱いと早老

（大正8年8月）

陸軍中將 佐藤 鋼次郎

編集委員長…過去の偕行記事の中から佐藤中將の『随感随録』を紹介する。

將校の早老について、高級將校が殿様扱いされていることへの批判であり、現在にも通用する指摘である。

## ●殿様の弊害

われら將校が早老して、頭脳が時代に追いつかないようになるのは、余りに早く殿様風になるからである。

中隊長でさえ、旅団長や師団長の言いつ分をまね、「あまりに些細なことに拘るのは宜しくない」と言つて、自ら手を下さない者もいる。中隊長すら既にこのようである。いわんや聯隊長は。

聯隊長等で、自分で仕事をする人は評判が悪く、新たに官庁から転任してきた人などは、最初は自ら仕事をするが、いわゆる聯隊長学を理解するに従い、全然手を下さなくなる。

そして、『不得要領で得要領でなくてはならぬ』などと、禅学的な信条を以て隊務を処理せんとしている。聯隊長くらいから東洋豪傑の典型である大山元帥の『おいどんは分らんから、皆

さんよか頼みます』を学んで、ただ盲判を押すばかりで、手を空うしているは、頭脳が早老するのは当然である。

というと、ある人は言うかもしれない。「聯隊長はなかなか頭を使わなくてはならない。特に戦術の統裁、演習の計画などに常に頭を悩まされておるではないかと」一応もつともの言い分ではあるが、これらの仕事は碁や将棋に頭を悩ますのと同じで、何ら科学的哲学的な知識を増すことはない。加えて、支隊長の決心処置で半生苦勞した結果が、戦争が大規模になった今日、いかなる効能を勝ち得たであろうか。

聯隊長ですら殿様である。旅団長や師団長となると殿様以上で、中国の大官連（高級官僚）に酷似したところがある。頭脳を使わぬばかりでなく、身体も使わない、ただ終日立っていることだけが名人である。

平素頭脳も身体も別段に活動させないが、さりとて役所に出頭しているとか、検閲に臨場しているとかで、自由に使用すべき時間はない。役所に出頭していたところで、あたかも幽閉でもされているかのように盲判を押す他に物を言うことも少ない。田舎の師団長を3年もすれば、手紙も書けなくなる。ましてや論文などは無論である。これに反して、揮毫したり、詩を作ったりするような余技を覚える。